

## II 審議の対象とした番組

日本テレビ『news every.』は「みんなが生きやすく」をコンセプトにした、平日夕方の報道番組である。本件放送は「飲み水の安全性」をテーマに、2012年4月25日の同番組内で約18分間にわたって放送された。以下、審議に関係しない部分については簡略な説明にとどめるが、全体的には、原発事故による飲食物の放射能汚染を心配する視聴者・市民の関心に真面目に応えようとする姿勢が感じられるものであった。

\*

冒頭、キャスターは、食品中の放射性セシウムに関する国の基準が今年4月から引き下げられ、飲料水は200ベクレル以下から10ベクレル以下へともっとも厳しくなったと説明。水道水の安全性を徹底検証するとして本件放送が始まる。

つづいて、男女60人に対する街頭アンケートで、放射能汚染が気になる食材のトップは野菜類、2番目に飲料水があげられたと紹介される。

環境省の河川モニタリング調査によると、各地の川底の土から放射性セシウムが検出されており、東京都葛飾区にある金町浄水場近くでは、1キログラム当たり1,010ベクレルが確認された。

スーパーマーケットの買物客の「水道水は飲んでいない」などの声が入り、原発事故後、ペットボトルの水や、大型ボトルで宅配される水を購入する人が急増していることが数字をあげて説明される。

宅配の水を販売する会社のひとつ、X社が映し出される。注文の対応に追われる同社のコールセンターの映像を背景に、北アルプスで産出する水を独自の方法でろ過処理し、12リットル995円で販売しているなどのナレーションが入る。

原発事故のあと、その出荷量が50パーセント増えたこと、消費者の問い合わせは具体的な製法にまで及んでいること、放射性物質は毎月の検査で検出されていないことなどが、同社の執行役員のインタビューを交えて紹介される。

小学生の子どもがいる主婦の家に、X社の宅配の水が届けられる。この主婦は原発事故後の昨年5月から宅配の水の購入を始め、飲料用としてだけでなく、米をとぐ際などにもこの水を使うため、1カ月の支払額は1万円近くにのぼると説明される。

主婦はインタビューに答え、「1回、水道水に（放射性物質が）入っていたことがあったじゃないですか。だから怖いなと思って」「神経質と思われるのもいやなんですけど、子どももいるし、あと10年後、15年後に、ああしとけばよかったとか、こうしとけばよかったとか思いたくないので」などと語る。

場面は金町浄水場が変わり、水道水がどのように浄水されるかが検証される。水道水を作る4つの工程のうちの3番目の工程で、河川の水に含まれる泥に付着した放射

性物質が除去される仕組みを、職員が現場を案内しながら説明する。川の水が入った大きなビーカーをその工程に見立て、薬品を加えることによって凝固した泥が沈殿し、きれいな水が上澄みとして残り、放射性物質が除去される実験が行われる。

東京都では毎日、高性能の機器を使って水道水のなかの放射性物質を検査していて、その結果を水道局のホームページで公表している。それによると、金町浄水場で作られた水道水からは放射性物質が検出されていないことが確認される。浄水場の職員が「水道水のなかには（放射性物質は）ないと断言できますので、ご安心して飲んでいただけるように願っております」と話す。

宅配の水を利用している主婦が再度登場し、取材スタッフから浄水場や検査の様子を撮影したテープを見せられる。主婦は「水道局の人が悪いのではなく、頑張ってくれてありがたいんですけど、ごめんね、飲むのはこっちの（購入した宅配の）お水みたいな……に、うちはなっちゃうかな。まだ子どももちっちゃいし。大丈夫なんだろうけど、もう一段家で注意をはかりたい」などと言う。

「原発事故が生んだ放射性物質への不安。水を作る側の努力と飲む側の意識にはいまだ埋まらぬ深い溝がありました」と語るナレーションで、VTRは終了する。

スタジオのキャスターは、「浄水場の人たちの努力と消費者の意識はまだ離れているというのが現状のようです」と引き取って、本件放送を締めくくる。

\*

約18分間の本件放送中、X社と主婦が登場する場面は約3分半だった。